双葉通信【第６８回】　　“ふくしまに恋をして（綾瀬はるか「八重の桜」）　　190115

上　田　　勉

◆原発が初めて稼働したのが「昭和」　◆原発事故によって神話が崩壊して　廃炉が始まったのが「平成」　◆「〇〇」（4 月発表の新元号）こそ、原発ゼロの時代に

「「神話」は、昭和に始まりました。1957 年には茨城県東海村の実験炉に月の原子の火がともり、10 年後には福島第一原発の建設が始まった。

こうして被爆国日本は 54 の世界原子炉を有する 3 位の原発大国になったのです。ところが、しょせん夢は夢。原子力の飛行機も鉄道も、超小型原子炉で十万IPの鉄腕アトムも、使えば使うほど燃料を増やす夢の原子炉も、実現を見ることはありますまい。

核兵器の実相を糊塗するために陳列された空虚な夢は、安全神話、経済神話、クリーン神話―3 つの神話の温床になりました。2011 年 3 月 11 日一。ゾンビのようによみがえる神話の終わりは平成でした。

福島第一原発事故が崩壊させたのは、「安全神話」だけではありません。事故処理にかかる費用は最低 21 兆円（消費税 2%増額の約 7.7 カ月分）。恐らくさらに増えるでしょう。結局は国民負担。これ 1 つとってもすでに、「経済神話」は故納言です。約 20 年探し続けても、高レベル放射性廃棄物の受け入れ先（最終処分場）の受け入れ先は見つからない。たとえ見つかったとしても、十万年に及ぶといわれる厳重管理に、どれだけ費用がかかるやら。安全対策にかかるコストは膨らみ、新増設どころではありません。現在、23 基が廃炉を決定、または検討中。平成は「大廃炉時代」の幕開けにもなりました。廃炉にもまた、長い歳月と膨大な費用が必要です。

15 年、温暖化防止の新ルール、パリ協定の採択を受けて、化石南鐐から再生可能エネルギーへ、宇宙船地球号のエンジンの付け替えが始まったのも平静です。

ドイツの「脱原発」だけではありません。世界第二の原発大国フランスも、原発依存度を減らすため、30 年までに陸上風力発電ンを 3 倍、太陽光発電を 5 倍に拡大。洋上風力の増設も具体化が進んでいます。高速炉計画は凍結です（高速炉計画に固執しているのに本だけ）。

福島の惨禍を見れば、原発は二酸化炭素（CO2）を出さないクリーンなエネルギーという「クリーン神話」もとうの昔に絵空事。温暖化対策を持ち出して小型原発の開発に向かうという日本は、国際的にはかなり異質な国なのです。

世界で勇逸、それも、第五福竜丸事件を含め 3 度の原水爆禍を背負う国、世界最悪級の原発事故（レベル 7）今現に向き合う国、その国の政府が、なぜここまで原発にこだわりをもつのでしょうか。

「去年の夏の異常な暑さも乗り切りました。省エネもすすみ、九州では太陽光の電力が余っています。原発へのこだわりは、電力のためだけではないのかもしれません。もしや軍事利用の可能性とか…」。東北大教授（環境科学））の明日香寿川さんは首をかしげます。」（「東京新聞」19 年 1 月 6 日付き）

【レベル７の事故を起こした福島第一原発（双葉町・大熊町)】

【レベル７の事故を起こして石棺になったチェルノヴィリ原発（ウクライナ)】